山月記

関連入試（二〇一六年・防衛医科大学校）

次の文章を読んで以下の問いに答えよ。

紀昌は直ぐに西に向って旅立つ。其の人の前に出ては我我の技の如き児戯にひとしいと言った師の言葉が、彼の自尊心にこたえた。もしそれが本当だとすれば、天下第一を目指す彼の望も、まだまだ前途程遠い訳である。己が業が児戯に類するかどうか、兎にも角にも早く其の人に会って腕を比べたいとあせりつつ、彼は只管に道を急ぐ。足裏を破り脛を傷つけ、危巌を攀じ桟道を渡って、一月の後に彼は漸く目指す山巓に辿りつく。イ

気負い立つ紀昌を迎えたのは、羊のような柔和な目をした、しかし酷くよぼよぼの爺さんである。年齢は百歳をも超えていよう。腰の曲っているせいもあって、白髯は歩く時も地に曳きずっている。

大声に遽だしく紀昌は来意を告げる。己が技の程を見て貰い度い旨を述べると、あせり立った彼は相手の返辞をも待たず、いきなり背に負うた楊幹麻筋の弓を外して手に執った。そうして、石碣の矢をつがえると、折から空の高くを飛び過ぎて行く渡り鳥の群に向って狙いを定める。弦に応じて、一箭忽ち五羽の大鳥が鮮やかに碧空を切って落ちて来た。ロ

一通り出来るようじゃな、と老人が穏かな微笑を含んで言う。だが、それは所詮射之射というもの、好漢未だ不射之射を知らぬと見える。

Aムッとした紀昌を導いて、老隠者は、其処から二百歩ばかり離れた絶壁の上迄連れて来る。脚下は文字通りの屏風の如き壁立千仞、遥か真下に糸のような細さに見える渓流を一寸覗いただけで忽ち眩暈を感ずる程の高さである。その断崖から半ば宙に乗出した危石の上につかつかと老人は駈上り、振返って紀昌に言う。どうじゃ。此の石の上で先刻の業を今一度見せて呉れぬか。今更引込もならぬ。老人と入代りに紀昌が其の石を履んだ時、石は微かにグラリと揺らいだ。強いて気を励まして矢をつがえようとすると、丁度崖の端から小石が一つ転がり落ちた。その行方を目で追うた時、覚えず紀昌は石上に伏した。脚はワナワナと顫え、汗は流れて踵に迄至った。老人が笑いながら手を差し伸べて彼を石から下し、自ら代って之に乗ると、では射というものを御目にかけようかな、と言った。まだ動悸がおさまらず蒼ざめた顔をしていたが、紀昌は直ぐに気が付いて言った。しかし、弓はどうなさる？　弓は？　老人は素手だったのである。弓？　と老人は笑う。弓矢の要る中はまだ射之射じゃ。不射之射には、烏漆の弓も粛慎の矢もいらぬ。

丁度彼等の真上、空の極めて高い所を一羽の鳶が甲輪を画いていた。その胡麻粒ほどに小さく見える姿を暫く見上げていた甘蠅が、やがて、見えざる矢を無形の弓につがえ、1満月の如くに引絞ってひょうと放てば、見よ、鳶は羽ばたきもせず中空から2石の如くに落ちて来るではないか。

紀昌はB慄然とした。ハ

九年の間、紀昌は此の老名人の許に留まった。その間如何なる修業を積んだものやらそれは誰にも判らぬ。

九年たって山を降りて来た時、人人は紀昌の顔付の変ったのに驚いた。以前の負けず嫌いな精悍な面魂は何処かに影をひそめ、何の表情も無い、3木偶の如く愚者の如き容貌に変っている。久しぶりに旧師の飛衛を訪ねた時、しかし、飛衛はCこの顔付を一見すると感嘆して叫んだ。之でこそ初めて天下の名人だ。4我儕の如き、足下にも及ぶものでないと。

邯鄲の都は、天下一の名人となって戻って来た紀昌を迎えて、やがて眼前に示されるに違いない其の妙技への期待に湧返った。ニ

所が紀昌は一向に其の要望に応えようとしない。いや、弓さえ絶えて手に取ろうとしない。山に入る時に携えて行った楊幹麻筋の弓も何処かへ棄てて来た様子である。其のわけを訊ねた一人に答えて、紀昌は懶げに言った。至為は為す無く、至言は言を去り、至射は射ることなしと。成程と、至極物分りのいい邯鄲の都人士は直ぐに合点した。弓を執らざる弓の名人は彼等の誇となった。紀昌が弓に触れなければ触れない程、彼の無敵の評判は愈愈喧伝された。

様様な噂が人人の口から口へと伝わる。毎夜三更を過ぎる頃、紀昌の家の屋上で何者の立てるとも知れぬ弓弦の音がする。名人の内に宿る射道の神が主人公の睡っている間に体内を脱け出し、妖魔を払うべく徹宵守護に当っているのだという。彼の家の近くに住む一商人は或夜紀昌の家の上空で、雲に乗った紀昌が珍しくも弓を手にして、古の名人・羿と養由基の二人を相手に腕比べをしているのを確かに見たと言い出した。その時三名人の放った矢はそれぞれ夜空に青白い光芒を曳きつつ参宿と天狼星との間に消去ったと。紀昌の家に忍び入ろうとした所、塀に足を掛けた途端に一道の殺気が森閑とした家の中から奔り出てまともに額を打ったので、覚えず外に顚落したと白状した盗賊もある。爾来、邪心を抱く者共は彼の住居の十町四方は避けて廻り道をし、賢い渡り鳥共は彼の家の上空を通らなくなった。ホ

雲と立罩める名声の只中に、名人紀昌は次第に老いて行く。既に早く射を離れた彼の心は、益益乙の域にはいって行ったようである。木偶の如き顔は更に表情を失い、語ることも稀となり、ついには呼吸の有無さえ疑われるに至った。「既に、我と彼との別、是と非との分を知らぬ。眼は耳の如く、耳は鼻の如く、鼻は口の如く思われる。」というのが老名人晩年の述懐である。

甘蠅師の許を辞してから四十年の後、紀昌は静かに、誠に5煙の如く静かに世を去った。その四十年の間、彼は絶えて射を口にすることが無かった。口にさえしなかった位だから、弓矢を執っての活動などあろう筈が無い。勿論、寓話作者としてはここで老名人に棹尾の大活躍をさせて、名人の真に名人たる所以を明らかにしたいのは山山ながら、一方、又、何としても古書に記された事実を曲げる訳には行かぬ。実際、老後の彼に就いては唯D無為にして化したとばかりで、次の様な妙な話の外には何一つ伝わっていないのだから。

その話というのは、彼の死ぬ一二年前のことらしい。或日老いたる紀昌が知人の許に招かれて行った所、その家で一つの器具を見た。確かに見憶えのある道具だが、どうしても其の名前が思出せぬし、其の用途も思い当らない。老人は其の家の主人に尋ねた。それは何と呼ぶ品物で、又何に用いるのかと。主人は、客が冗談を言っているとのみ思って、ニヤリととぼけた笑い方をした。老紀昌は真剣になって再び尋ねる。それでも相手は曖昧な笑を浮べて、客の心をはかりかねた様子である。三度紀昌が真面目な顔をして同じ問を繰返した時、始めて主人の顔に驚愕の色が現れた。彼は客の眼を凝乎と見詰める。相手が冗談を言っているのでもなく、気が狂っているのでもなく、又自分が聞き違えをし

ているのでもないことを確かめると、彼はE殆ど恐怖に近い狼狽を示して、吃りながら叫んだ。

「ああ、夫子が、――古今無双の射の名人たる夫子が、弓を忘れ果てられたとや？　ああ、弓という名も、その使い途も！」

其の後当分の間、邯鄲の都では、F画家は絵筆を隠し、楽人は瑟の絃を断ち、工匠は規矩を手にするのを恥じたということである。

（中島敦『名人伝』による）

註　○危巌＝崩れそうな大岩。　○攀じ＝よじ登る。　○山巓＝山頂。　○白髯＝白いほおひげ。　○楊幹麻筋の弓＝柳を麻糸で巻いた弓。　○石碣の矢＝越王が用いたとされる矢。　○一箭＝一矢。　○好漢＝ここでは「お前さん」程度の意。　○壁立千仞＝壁のように切り立った崖と深い谷底。　○烏漆の弓＝黒い漆で塗られた弓。　○粛慎の矢＝北方民族である粛慎から周王に贈られたとされる矢。　○甘蠅＝甘蠅老師。この老名人の名。　○邯鄲の都＝中国戦国時代、趙の都。　○至為＝至極の道理にかなったしわざ。　○三更＝午後十一時頃から午前一時頃まで。　○徹宵＝夜どおし。　○羿と養由基＝両人とも古代の弓の名人として知られる。　○参宿と天狼星＝星座の名。参宿はオリオン座南方の三星を天狼星はシリウスをいう。　○顚落＝転落。　○十町四方＝町は距離の単位。一町は約一〇九メートル。　○棹尾＝「ちょうび」の慣用読み。事のおわり。最後。　○夫子＝師などを敬っていう呼び方。　○瑟＝中国古代の弦楽器のひとつ。　○規矩＝ものさし。

問一　傍線部Aの理由として最も適当なものを次の(1)～(5)のうちから一つ選べ。

(1) 足もとが不安定で落下の危険もある山頂で弓を射るなどという無理を求められそうな予感がしたから。
(2) 都をたってから一か月もかけて訪ねてきた努力と苦労を認められずに悪しざまに言われてしまったから。
(3) 弓の技術では世界一だと自認していたのに腰の曲がった老人にあっけなく打ち負かされてしまったから。
(4) 鳥を五羽も撃ち落とす練磨の技を見せたのに価値観そのものを否定されるようなことを言われたから。
(5) 気があせってしまい本来の自分の実力が発揮できずにいるところを低く評価されてしまったから。

問二　空欄甲を補う語句として最も適当なものを次の(1)～(5)のうちから一つ選べ。

(1) 怖怖と　(2) 喜喜と　(3) 延延と　(4) 悠悠と　(5) 着着と

問三　二重傍線部1～5のうち表現の技法として異質なものを選び(1)～(5)の番号で答えよ。

(1) 1　(2) 2　(3) 3　(4) 4　(5) 5

問四　傍線部Bの意味として最も適当なものを次の(1)～(5)のうちから一つ選べ。

(1) 意志が強く物事に動じないさま。　(2) 恐ろしさで身の震えるさま。
(3) 恥じ入って赤面するさま。　(4) あまりのことに動けずにいるさま。
(5) 目をぎょっとさせて驚くさま。

問五　傍線部Cの理由として最も適当なものを次の(1)～(5)のうちから一つ選べ。

(1) 以前から持っていた精悍さに加えて現在の紀昌の風情には名人特有のゆとりが感じられたから。
(2) 名人になった弟子が自分の弓の技術を上回る妙技を眼前で見せてくれるだろうという期待から。
(3) 九年もの間離れていた弟子がむかしのように自分に会いに来てくれたのがうれしかったから。
(4) 紀昌が本当の名人になったことが知られて師である自分の評価も高くなることが予想できたから。
(5) 自分の弟子が自らを超えて何物にも捉われない名人になったことを示すさまに思われたから。

問六　邯鄲の都での紀昌に関する噂が表すものとして最も適当なものを次の(1)～(5)のうちから一つ選べ。

(1) もとより噂ばなしなどは信用できないことをことさら強調して表す。
(2) 超自然的な事象を列挙して名人が世人と違う世界にいること表す。
(3) とんでもない高みに達した名人が生死不問の伝説になったことを表す。
(4) 実例を挙げて不射之射の詳細を示すことで名人の偉大さを表す。
(5) 幻想的な情景を描写することで名人が至った境地の遠大さを表す。

問七　空欄乙を補う語句として最も適当なものを次の(1)～(5)のうちから一つ選べ。

(1) 不偏不党　(2) 軽挙妄動　(3) 厚顔無恥　(4) 無為徒食　(5) 枯淡虚静

問八　傍線部Dの意味として最も適当なものを次の(1)～(5)のうちから一つ選べ。

(1) 目立つことがなく普通の人と同じように静かな余生を過ごすこと。
(2) 徳の高い人物は特段何もしなくても周囲を教化するということ。
(3) 全てを成し遂げたので何も求めず死を待つのみになるということ。
(4) 何にも捉われず自然と精神的に完全な自由を獲得すること。

(5) 何もしないことが即ち至為であると理解して死んでいくこと。

問九　傍線部Eの理由として最も適当なものを次の(1)〜(5)のうちから一つ選べ。

(1) どうにか弓を射らせようと用意したのに名人が弓そのものを認識できなかったため。
(2) 名人のいる世界と自分がいる俗世間とものの見方の違いを再確認させられたため。
(3) 都に伝わる名人に関する噂が真実ではないということを確信してしまったため。
(4) 度を失っているのでもないのに慣れ親しんだはずの弓矢を名人が忘れていたため。
(5) 極意に至った名人に接して自分が立脚する価値観を根底から揺さぶられたため。

問十　傍線部Fの理由として最も適当なものを次の(1)〜(5)のうちから一つ選べ。

(1) 紀昌の域に達していない人間に対して都の人人の視線が冷たく厳しいものに変化したため。
(2) 道具を使うことに熟達していることこそ名人であるはずがその域を超えた名人がいたため。
(3) 紀昌の弓にくらべると画家や楽人、工匠は目指すところの水準が低いことがわかったため。
(4) 自分が使っている道具が紀昌の使っていた道具に比べて格段程度が低いと思われたため。
(5) 我こそがその道の名人だと自負していたところ紀昌の振舞いに自慢の鼻を折られたため。

問十一　以下の文を文中に補う場所として最も適当なものを次の(1)〜(5)のうちから一つ選べ。

今にして始めて芸道の深淵を覗(のぞ)き得た心地であった。

(1) [イ]　(2) [ロ]　(3) [ハ]　(4) [ニ]　(5) [ホ]

問十二　中島敦の作品を次の(1)〜(5)のうちから一つ選べ。

(1) 李陵　(2) 天平の甍　(3) 巴里に死す　(4) 杜子春　(5) 春琴抄

【解答】

問一　(4)
問二　(4)
問三　(4)
問四　(2)
問五　(5)
問六　(2)
問七　(5)
問八　(2)
問九　(4)
問十　(2)
問十一　(3)
問十二　(1)

【解説】

問一　紀昌が自慢の技で「五羽の大鳥」を一度に射落としたのに、老人は称賛するどころか「一通り出来るようじゃな、…だが…未だ不射之射を知らぬと見える」と半人前扱いしたため「ムッとした」のである。この時点では老人は技を披露していないので(3)は不適。

問三　4「我儕の如き」は「私なんかには」というニュアンスの謙遜表現。それ以外は直喩表現である。

問五　傍線部Cの直後に「之でこそ初めて天下の名人だ。我儕の如き、足下にも及ぶものでない」とある。

問六　「様様な噂が人人の口から口へと伝わる」の段落に着目。「射道の神が…妖魔を払うべく徹宵守護に当っている」「雲に乗った紀昌が…腕比べをしている」「一道の殺気が…外に顚落した」は、「天下一の名人」となった紀昌にふさわしい噂として描かれている。(1)は「噂ばなしなどは信用できない」、(3)は「生死不問」、(4)は「不射之射の詳細を示す」、(5)は「名人が至った境地の遠大さ」が不適。

問九　弓について「何と呼ぶ品物で、又何に用いるのか」と紀昌が繰り返し尋ねたことに対する主人の反応である。傍線部E直後の「古今無双の射の名人たる夫子が、弓を忘れ果てられたとや？　ああ、弓という名も、その使い途も！」から(4)が正解。紀昌が弓を忘れ去ってしまったことへの衝撃の大きさを表しているのであり、(2)や(5)のように、名人と俗人の違いを感じたわけではない。

問十　紀昌の言動から、「技を極めた結果、道具を忘れ果てるくらいでないと真の名人とは言えない」という風潮が生まれたのである。(3)がやや紛らわしいが、「目指すところの水準が低い」が本文から読み取れない。

問十二　(2)「天平の甍」は井上靖、(3)「巴里に死す」は芹沢光治良、(4)「杜子春」は芥川龍之介、(5)「春琴抄」は谷崎潤一郎の作品。